

Title	「楚狂」と「狂夫」：李白と杜甫の「狂」について
Sub Title	"Chukuang" and "Kuangfu" : madness in the poems of Li Bai and Du Fu
Author	八木, 章好(Yagi, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.40 (2008.) ,p.153- 172
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20081220-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「楚狂」と「狂夫」

——李白と杜甫の「狂」について

八 木 章 好

はじめに

本稿は、中国の文人精神における「狂」の諸相を包括的に考察することを目的とした研究の一環として、特に文学の領域から唐詩を対象として論じるものである。まず、唐代を代表する二人の詩人、李白と杜甫の作品を例に挙げながら、詩語としての「狂」の諸相を概観する。続いて、詩人が自らを「狂」と称して歌った詩に焦点を当て、李白・杜甫からそれぞれ典型的な作品を一首ずつ選んで比較対照し、「狂」字の内包する重層的な多義性がいかにして両詩人の相異なる思想的傾向と結びついているかを考察する。

「狂」は、中国の伝統的な思想・文学を語る上で極めて重要な概念であり、古典詩における「狂」についてはすでに数多くの論著がある。¹⁾ 本稿は、先学諸氏の研究成果に導かれながら、唐詩における「狂」字の用例を改めて整理した上で、詩語としての「狂」に新たな視点を提示することを試みるものである。

なお、本文に引用した李白の詩は、瞿蜕園・朱金城校注『李白集校注』に、杜甫の詩は、清・仇兆鰲『杜詩詳注』にそれぞれ基づく。

一 詩語としての「狂」

『詩経』以来の歴代の詩人における「狂」字の使用状況を通観すると、唐代の李白・杜甫に至って初めてまとまった数の使用例が現れることが認められる。²⁾

『詩経』においては、使用頻度はわずか六例であり、しかも主に「狂童」、「狂夫」のように女性が意中の男性を呼ぶ際の特殊な用例に限られる。魏晋の時代、「狂」は当時の

思潮を色濃く反映する概念となり、名士たちの演じた狂態の逸話が数多く残されており、『晋書』や『世説新語』などの文章中には「狂」字が頻出する。しかし、詩の世界においては、例えば曹植・阮籍・嵇康らにはいずれも使用例が皆無である。六朝から初唐にかけての著名な詩人たちについても、「狂」字の使用例はまったく無いか、あるいはあってもわずかに数例にとどまる。

ところが、盛唐に至ると、李白が二十七例、杜甫が二十六例とにわかに用例数が多くなり、その用い方においても、詩人の境遇や思想と密接に結びついたものとなり、「狂」字が初めて中国古典詩において“詩語”と呼ぶにふさわしい質と量を備えるようになる。これを継承して、その後、白居易・韓愈・孟郊ら中唐の詩人たちが「狂」字を多用し、宋代に至ると、蘇軾・陸游らがそれぞれ特徴的に「狂」字を歌っている。³⁾

以下、李白と杜甫の詩を中心として、詩語としての「狂」字の用例を意義別にいくつかのグループに分けて見ていくことにする。

(一)「狂風」

狂風吹古月	狂風 古月を吹き
竊弄章華臺	竊 <small>ひそ</small> かに弄 <small>ろう</small> す 章華台
北落明星動光彩	北に落つ明星 光彩を動かし
南征猛將如雲雷	南征の猛將 雲雷の如し (李白「司馬將軍歌」)

胡地の月夜に吹き荒れる「狂風」は、ただの強風・大風ではない。「狂」は、尋常ならぬさま、何やら人の心を強烈に揺さぶる異様なさまを表す。ここでは、将軍がこれから兵を率いて適地へ赴き、激しい戦闘が起こることを予感させる心理的働きを伴う。

横江西望阻西秦	横江 西に望めば西秦と阻 <small>へだ</small> たり
漢水東連楊子津	漢水 東に連なる楊子の津
白浪如山那可渡	白浪 山の如し 那 <small>なん</small> ぞ渡るべけんや
狂風愁殺峭帆人	狂風 愁殺す 峭帆 <small>しやうはん</small> の人 (李白「横江詞六首」其三)

横江の白波が逆巻いて渡れない。狂ったように吹き荒れる強風が船頭たちを悩ませる。李白が自らの険難な前途を寓した詩として読めば、ここでもまた「狂風」は単なる自然現

「楚狂」と「狂夫」

象としての烈風ではなく、詩人を取り巻く状況の困難、あるいは安祿山の乱が勃発した当時の政治的風波を象徴するものである。

客自長安來 客は長安より来り
還歸長安去 還^また長安に帰り去る
狂風吹我心 狂風 我が心を吹いて
西挂咸陽樹 西のかた咸陽の樹に挂く (李白「金郷送韋八之西京」)

都長安へ戻っていく旅人を送った詩。「狂風」は、詩人の心を掻きむしるような物狂おしい風である。金郷から遙か遠くの咸陽まで吹き通す強風であると同時に、「狂」字は、詩人の心の強い昂揚を表す。都に対する恋情・懐念が触発され、居ても立ってもいられない思いで心乱れる詩人の姿そのものとして描かれている。

昨夜狂風度 昨夜 狂風^{わた}度り
吹折江頭樹 吹き折る江頭の樹 (李白「長干行二首」其二)

狂風吹卻妾心斷 狂風 吹却して妾が心断ち
玉筍并墮菱花前 玉筍^{ぎよくちよ} 並び墮つ菱花の前 (李白「代美人愁鏡二首」其二)

上の二首における「狂風」は、いずれも女性の物狂おしい気持ちを表す。前者は商用で旅に出ている夫を案じる妻の焦慮、後者は自分から去っていった男性に思慕の念を募らせる女性の悲哀が投影されている。樹木を吹き倒す突風、心を断ち切らんばかりの暴風は、女性の情念の激しさと遣り場のない思いの虚しさを表象するものである。

けだし、「風」という自然現象の属性は、その方向性や運動性において、「狂」の心理状態としての特性とよく似ている。「狂」字がしばしば風を形容し、また「狂」を歌った詩の中に多く風の描写が伴うのは決して偶然ではない。

(二)「猖狂」

兵革自久遠 兵革 久遠^よ自りす
興衰看帝王 興衰 帝王を看る

漢儀甚照耀　漢儀　甚しやうやうだ照耀す
胡馬何猖狂　胡馬　何しやうきやうぞ猖狂たる　（杜甫「入衡州」）

大暦五年（七七〇）の作。杜甫は兵乱のために各地を流浪しながら衡州に入り、安史の乱を回顧しながらこの詩を歌った。「猖狂」は、賊軍の猛々しさ、横暴なさまを言う。

蚩尤終戮辱　蚩尤　終りくじよくに戮辱せらる
胡羯漫猖狂　胡羯　猖狂なすること漫かれ
（杜甫「寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史參三十韻」）

ここでは、安祿山を伝説上の狂暴な豪族「蚩尤」に譬え、史思明を北方の異民族「胡羯」に譬える。杜甫がこの詩を作った乾元二年（七五九）、史思明は安慶緒を攻め滅ぼし自ら大燕皇帝と名乗っていた。詩は、その獐猛に荒れ狂う「猖狂」ぶりを苦々しく歌う。

彼人之猖狂　彼の人の猖狂
不如鵠之彊彊　かきさき　きやうきやう　鵠の彊彊　したるに如かず
彼婦人之淫昏　彼の婦人の淫昏
不如鶉之奔奔　うずら　ほんほん　鶉の奔奔たるに如かず　（李白「雪謔詩贈友人」）

李白が婦女・小人らから受けた讒言をすすぐ意図で詠んだ詩である。『詩経』鄘風「鶉之奔奔」篇に衛の宣姜が淫乱で禽獣にも劣ることを諷して「鶉之奔奔、鵠之彊彊」とあるのを引いている。「猖狂」は、気性が激しく狂気を帯びたさまを言う。

龍虎相啖食　竜虎　相たんしよく啖食し
兵戈逮狂秦　へいか　兵戈　狂秦およに逮ぶ　（李白「古風五十九首」其一）

去年南行討狂賊　去年　南行して狂賊を討つ
臨江把臂難再得　江に臨みうで臂を把ること再びは得難し　（杜甫「苦戰行」）

「狂秦」は、狂暴な秦国。武力による霸道で天下を統一し、焚書坑儒の暴政を行った秦を言う。「狂賊」は、段子璋を指す。上元二年（七六一）四月、梓州刺史段子璋が造反し、

「楚狂」と「狂夫」

綿州・遂州を占領して自ら梁王と称した。これらの「狂」はいずれも「猖狂」の意であり、もっぱら悪い意味に用いる。

(三)「発狂」「狂喜」

束帶發狂欲大叫	束帶 狂を發して大いに叫ばんと欲す
簿書何急來相仍	簿書 何ぞ急に來りて相仍るや
南望青松架短壑	南のかた青松の短壑に架くるを望まん
安得赤脚踏層冰	安くんぞ赤脚もて層冰を踏むを得ん (杜甫「早秋苦熱堆案相仍」)

乾元元年（七五八）、華州に左遷されてまもなくのこと、秋になっても暑さが耐え難く、食欲は減退し、窮屈な官服をまとって次々に押し寄せる書類に向かう憤懣の心中を表白した。「発狂」は、気が狂うこと。気が狂わんばかりの不快で悶々とした心情を言う。

劍外忽傳收薊北	劍外忽ち伝う 薊北を取むと
初聞涕淚滿衣裳	初め聞きて 涕淚衣裳に滿つ
卻看妻子愁何在	却りて妻子を看れば 愁いは何くにか在る
漫卷詩書喜欲狂	漫りに詩書を巻き 喜びて狂せんと欲す

(杜甫「聞官軍收河南河北」)

広徳元年（七六三）の春、梓州での作。官軍が薊北を安史の賊軍から奪回して河北・河南を恢復したという知らせが届いた。これを聞いて、杜甫は感激のあまり涙を流し、慌ただしく帰郷の身支度をしながら気も狂わんばかりに喜ぶ。

この類の「狂」は、何らかの外的要因に触発され、極度の感情の高ぶりによって尋常な心の状態ではいられないさまを言う。歓喜・悦楽・憤懣・悔恨など、良い意味にも悪い意味にも用いる。

(四)「顛狂」「清狂」「狂歌」

江上被花惱不徹	江上 花に悩まされ徹せず
無處告訴只顛狂	告訴するに処無く 只だ顛狂す

走覓南鄰愛酒伴 走りて覓む 南鄰 愛酒の伴
經旬出飲獨空牀 旬を経て出飲し 独り空牀あるのみ

(杜甫「江畔獨歩尋花七絶句」其一)

上元二年（七六一）、成都の草堂に生活していた時の作。江辺に咲き誇る花々に触発された惜春の情、春うららの風情とは裏腹に何一つ成すことなく衰えていく我が身に対する憤懣の情を歌う。「顛狂」は、そうした胸の内を訴える相手も無く、遣り場のないまま狂おしいばかりに心乱れるさまを言う。

羣盜無歸路 群盜 歸路無く
衰顔會遠方 衰顔 遠方に会す
尚憐詩警策 尚お憐れむ 詩の警策
猶記酒顛狂 猶お記す 酒の顛狂 (杜甫「戲題寄上漢中王三首」其三)

宝応元年（七六二）、綿州での作。梓州にいる漢中王（讓皇帝の第六子、李瑀）に寄せ、旧交に頼って援助を求めた詩である。ここの「顛狂」は、酒に酔って羽目を外すさま。杜甫が李瑀に向かって、自分のそうした酔態を覚えておいででしょうと追憶を促している。

今日竹林宴 今日 竹林の宴
我家賢侍郎 我が家の賢侍郎
三杯容小阮 三杯 小阮しょうげん いを容れよ
酔後發清狂 酔後 清狂を發するを (李白「陪侍郎叔游洞庭醉後三首」其一)

刑部侍郎である叔父の李暉に従って洞庭湖で酒宴に興じた際の作。李暉を阮籍に、李白自身をその甥の阮咸に譬える。阮咸もまた阮籍と並んで「竹林の七賢」の一人に数えられ、放胆闊達な振る舞いで知られる。「清狂」について、王琦は、「詩人の称する所、多くは情を詩酒にほしまま縦にするの類を以て清狂と為す」と注している。⁴⁾

放蕩齊趙間 放蕩たり 齊趙の間
裘馬頗清狂 裘馬きゅうば 頗る清狂なり
春歌叢臺上 春は歌う 叢台の上

「楚狂」と「狂夫」

冬獵青丘旁 冬は狩す 青丘の旁かたわら (杜甫「壯遊」)

晩節漸於詩律細 晩節漸く詩律に於て細なり
誰家數去酒盃寛 誰が家にか数々去って酒盃寛ならむ
唯君最愛清狂客 唯だ君最も愛す清狂の客
百遍相過意未闌 百遍相過るも意未だ闌ならず (杜甫「遣悶戲呈路十九曹長」)

上の杜甫の詩二首においても同様に、「清狂」の語は、放逸不羈・放蕩三昧のさま、情に任せてもっぱら詩を賦し酒に浸るさまを言う。

我憶君到此 我 君を憶うて此に到り
不知狂與羞 狂と羞とを知らず
月下 一見君 月下に一たび君を見なば
三杯便迴橈 三杯便ちかじ めく橈を廻らさん

(李白「翫月金陵城西孫楚酒樓達曙歌吹日晚乘醉著紫綺裘烏紗巾與酒客數人棹歌秦淮往石頭訪崔四侍御」)

李白が飲み仲間と共に金陵の酒樓で夜明けまで月見の宴を行い、翌日また終日飲み続けた末、夕暮れに至り酒興に乗じて船で石頭城の崔侍御史を訪ねた際の詩である。ここの「狂」もやはり「顛狂」,「清狂」の類に属す。李白ら酒客たちは、秦淮の水に棹さし、泥酔して船頭をからかい、遊女をひやかしながら石頭城に到着する。足かけ三日にわたる無礼講である。かような狂態・酔態、破廉恥行為は、世間の目には「狂」であり「羞」であろうが、そうした行為こそ自分のライフスタイルだと李白は言わんばかりである。魏晋の名士たちの傍若無人ぶりを彷彿とさせる。

耽酒須微祿 酒に耽るには微祿を須まつ
狂歌託聖朝 狂歌して聖朝に託す (杜甫「官定後戲贈」)

狂歌遇形勝 狂歌 形勝に遇い
得醉即爲家 酔いを得れば即ち家と為さん (杜甫「陪王侍御宴通泉東山野亭」)

寇盜狂歌外 寇盜 狂歌の外
形骸痛飲中 形骸 痛飲の中 (杜甫「陪章留後侍御宴南樓」)

上に挙げた「狂歌」は、いずれも情をほしいままにして声高らかに歌うことを言う。「耽酒」, 「得醉」, 「痛飲」と対をなすように、いずれも飲酒行為を伴う。しかも、存分な酒、時として度を越した酒であり、「狂歌」とともに胸中の感慨や情念を発散させ、憤懣や苦悩を解き放つ役割を担う。

(五)「狂客」「狂叟」「狂夫」

一州笑我爲狂客 一州 我を笑いて狂客と爲し
少年往往來相譏 少年 往往來りて相譏^{そし}る
(李白「醉後答丁十八以詩譏余槌碎黃鶴樓」)

李白の「江夏贈韋南陵冰」と題する詩に「我且爲君槌碎黃鶴樓，君亦爲吾倒卻鸚鵡洲」(我且つ君が爲に黃鶴樓を槌碎せむ，君も亦た吾が爲に鸚鵡洲を倒却せよ)とあるのを、丁十八(経歴未詳)が放縦として譏ったのに対して、李白が戯れに答えた詩である。「狂客」は、とんでもないことをしでかす人間，馬鹿なことをする男。黃鶴樓を槌で打ち砕かんと大言壮語した李白を指す。

披髮之叟狂而癡 ^{ひはつ}披髮の叟 狂にして痴なり
清晨徑流欲奚爲 清晨 流れを徑^なて奚をか為さんと欲す
旁人不惜妻止之 旁人惜しまず 妻之を止めんとし
公無渡河苦渡之 公 河を渡る無かれと 苦しみて之を渡る (李白「公無渡河」)

氾濫する黄河を渡ろうとする一人の気の触れた老人。周囲の者が傍観する中、妻の哀願を振り切って河に入り、溺死してその屍は海へ流れ、ついに鯨の餌食となる。「狂叟」は、安史の乱以降の動乱の世に身を置く李白自身を譬える。如何ともしがたい不可抗力に対して狂おしい抵抗を試みる「狂叟」の姿に自らをオーバーラップさせている。

「狂客」, 「狂叟」は、いずれも周囲の社会からはみ出た人間，世に容れられずに弾き出された人間である。「一州」に笑われ, 「少年」に譏られ, 「旁人」に無視されている存在

「楚狂」と「狂夫」

である。李白はそれを諧謔的な調子で歌う。疎外感から来る寂寞や挫折感から来る鬱屈した気分はまったく見られない。どこか誇らしげでさえあり、己と相容れない俗世間の凡庸な輩から「狂」者と呼ばれることはむしろ本望とでも言いたげである。

四明有狂客 四明に狂客有り
風流賀季真 風流たり 賀季真
長安一相見 長安 一たび相見るや
呼我謫仙人 我を謫仙人と呼ぶ (李白「對酒憶賀監二首」其一)

賀公雅吳語 賀公 ^{つね}雅に吳語す
在位常清狂 位に在るも常に清狂なり
上疏乞骸骨 疏^{たてまつ}を上りて骸骨を乞い
黃冠歸故鄉 黃冠 故郷に帰りぬ (杜甫「遣興五首」其四)

ここの「狂客」は、賀知章（字は季真）を指す。賀知章は、自ら「四明狂客」と号した。太子賓客、秘書監をつとめ、当時の詩壇の重鎮でもあった。晩年は放誕な行動が目立ち、官を辞した後、郷里に帰って道士になった。都でもお国弁丸出で、高位高官でありながらも「清狂」、身分に拘泥することのない脱俗的で風情のある人物であったとされる。李白も杜甫も彼のことを歌った詩をそれぞれ複数残している。杜甫の「飲中八仙歌」にも第一番目に登場し、「知章騎馬似乗船、眼花落井水底眠」（知章が馬に騎るは船に乗るに似たり、^{まなこくら}眼花み井に落ちて水底に眠る）とあるように、その人並みでない酔態のさまが描かれている。

当時、多くの士人たちから敬愛と憧憬の念を以て慕われた賀知章が「狂客」と自称したことは、唐詩における詩語としての「狂」字に少なからぬ影響を与えていると思われる。李白が「風流賀季真」と称揚したように「風流」と謳われた賀知章が自らを「狂」と称したことによって、「狂」という概念と「風流」という概念が結びつき、「狂」者と呼ばれることは、いわば風流人として認められることに等しくなったのである。

玉手開緘長嘆息 玉手 ^{かん}緘を開きて 長く嘆息す
狂夫猶戍交河北 狂夫 猶^{まも}お戍る 交河の北 (李白「搗衣篇」)

妾本洛陽人 妾は本^{もと} 洛陽の人
狂夫幽燕客 狂夫は幽燕の客 (李白「代贈遠」)

窺鏡不自識 鏡を窺^{うかが}いて自ら識^しらず
況乃狂夫還 況んや乃ち狂夫の還るをや (李白「閨情」)

上の三例に見る「狂夫」は、いずれも遠征などで女性のそばにいない夫のことを言う。この類の「狂夫」の語は『詩経』にすでに用例がある。齊風「東方未明」篇に「折柳樊圃，狂夫瞿瞿」(柳を樊圃^{はんぼ}に折り，狂夫瞿瞿^{くく}たり)とあり、「狂夫」は無茶なことをする男(夜這いに来る恋人)の意。「狂童」や「狡童」などと同義の語であり，相手の男を馬鹿なことをする人と戯れに罵る諧謔的呼称である。唐代には，王維の詩などにも用例が見られ，出征したままの夫を思う女心を歌った閨怨詩における常套的詩語として定着した。⁵⁾

本稿の以上の「狂」は，詩人の思想性との関連がまったく無いもの，またはあっても比較的稀薄なものである。便宜上，挙例を基本的に李白と杜甫に絞ってきたが，実は他の唐代の詩人，あるいは唐以後も含めた歴代の詩人の作品を例に挙げても，その指す意味内容にほとんど差異は生じない。

以下，詩人が自らを「狂」と呼んだ詩の中から，李白と杜甫に典型的なものをそれぞれ一首ずつ取り上げて比較し，極めて思想的傾向の異なる二人の詩人において，同じ「狂」字がいかに特徴的，対照的に読み込まれているかを考察してみたい。

二 李白の「楚狂」

李白は，「廬山謠寄廬侍御虛舟」と題する詩の中で自らを「楚狂」と称している。上元元年(七六〇)，李白六十歳。流刑から恩赦に遭った後に廬山を過ぎた際，廬虚舟に寄せた詩である。廬虚舟(字は幼真)は，肅宗の時，殿中侍御史の任にあり，かつて李白と共に廬山に遊んだことがある。

我本楚狂人 我は本^{もと} 楚の狂人
鳳歌笑孔丘 鳳歌 孔丘を笑う
手持綠玉杖 手に持す 綠玉の杖

「楚狂」と「狂夫」

朝別黄鶴樓	<small>あした</small> 朝に別る 黄鶴樓
五嶽尋仙不辭遠	五岳に仙を尋ねて遠きを辞せず
一生好入名山游	一生 好んで名山に入りて遊ぶ
廬山秀出南斗旁	廬山秀出す 南斗の旁
屏風九疊雲錦張	屏風九疊 雲錦張る
影落明湖青黛光	影は明湖に落ちて 青黛光り
金闕前開二峰長	<small>きんけつ</small> 金闕 前に開いて 二峰長し
銀河倒挂三石梁	<small>さかしま</small> 銀河 倒に挂る 三石梁
香爐瀑布遙相望	香炉の瀑布 遙かに相望む
迴崖沓嶂凌蒼蒼	<small>かいがいうしやう</small> 迴崖沓嶂 蒼蒼を凌ぎ
翠影紅霞映朝日	翠影紅霞 朝日に映ず
鳥飛不到吳天長	鳥飛んで到らず 吳天長し
登高壯觀天地間	高きに登りて壯観す 天地の間
大江茫茫去不還	大江茫茫として 去りて還らず
黄雲萬里動風色	黄雲万里 風色を動かし
白波九道流雪山	白波九道 雪山を流す
好爲廬山謠	好んで <small>つく</small> 爲る廬山の <small>うた</small> 謠
興因廬山發	興は廬山に因りて発す
閑窺石鏡清我心	<small>しづ</small> 閑かに石鏡を窺い 我が心を清くす
謝公行處蒼苔沒	謝公行きし処 蒼苔に没す
早服還丹無世情	早く還丹を服して世情無く
琴心三疊道初成	琴心三疊 道初めて成る
遙見仙人綵雲裏	遙かに仙人を見る <small>さいうん</small> 綵雲の <small>うち</small> 裏
手把芙蓉朝玉京	手に芙蓉を把りて 玉京に朝す
先期汗漫九垓上	先ず期す汗漫 <small>きゆうがい</small> 九垓の上
願接盧敖遊太清	願わくは盧敖を接えて太清に遊ばん

詩の冒頭で、李白は自らを鳳歌を歌い孔子を笑ってやった男、かの「楚の狂人」なりと名乗る。続いて、俗世と決別して山に入ったことを歌い、さらに道教にゆかりのある廬山を歌い、その峰々や瀑布の壮大で秀麗な景観を描写する。仰視したり、遠望したり、俯瞰したり、さまざまな視点から色彩豊かに修辭を凝らす。そして最終段では、還丹の仙薬を

服して世情を忘れ、心身を修練して仙道を成就し、神仙の棲む天上界に遨遊せんとする詩人の願望を歌い、末尾に廬山と廬侍御にちなんで仙人廬敖の逸話（『淮南子』「道応訓」篇）を引いて全篇を結んでいる。

「楚狂」の故事は、『論語』「微子」篇に、「楚狂接輿、歌而過孔子曰、鳳兮鳳兮、何徳之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而已而、今之從政者殆而。孔子下、欲與之言。趨而辟之、不得與之言」（楚の狂接輿、歌いて孔子を過ぎて曰く、「鳳よ鳳よ、何ぞ徳の衰えたる。往く者は諫むべからず、来る者は猶お追うべし。已まんか已まんか、今の政に従う者は殆し」と。孔子下りて、之と言わんと欲す。趨りて之を辟け、之と言うを得ず）とある。接輿は、春秋時代の楚の隱者。朱熹『論語集注』に、「接輿は楚人。狂を伴りて世を辟く」とあるように、狂人を装って乱世を避ける隱者である。『莊子』「人間世」篇にも、『論語』「微子」篇とほとんど同じ内容で少々言を加えた逸話が見える。⁶⁾

李白が自らを「楚狂」になぞらえるのは、俗世に嫌気がさし、現実の政治的世界を自分の居るべき場所にあらざとして、そこから距離を隔てた位置に超然として自らを置こうとする姿勢の表明である。安史の乱以来、唐王朝は混乱し、各地で戦乱が相次ぎ、李白は自身の傲岸不遜な性癖もわざわいして、政界で自分が望むような活躍ができないままだった。世に容れられない時、詩人は往々にして自らを「狂」と位置づける。政治に参画することができずにアウトサイダーであることを強いられ、その憤懣が周囲の社会に対して反発的に働く時、詩人は「楚狂」を自任することによって、鬱屈した思いを解き放ち、精神の平衡を保とうとするのである。

接輿の生き方は、儒家的にも道家的にも解釈が可能である。接輿に関する同じ逸話が『論語』にも『莊子』にも見られるのは、その辺の事情を反映するものでもあろう。儒家的に捉えれば、接輿は時の政治を醒めた目で観察し、これに対して鋭い批判の姿勢を示す智者・賢者ということになる。一方、道家的に捉えれば、世俗に背を向け、現実の世界から遠く離れた位置に我が身を置く超越者となる。

では、「廬山謠」詩の場合はどうであろうか。上の分け方では、むしろ后者であるが、ここで歌われている「楚狂」は、実は『論語』や『莊子』に登場した本来の姿のままの接輿ではなく、もう一つ別の顔、仙人としての顔を持っている。「我本楚狂人、鳳歌笑孔丘」と歌い起こした李白は、最後に「先期汗漫九垓上、願接廬敖遊太清」と結び、飄渺たる仙境に遊ばんとする願望を語っている。つまり、李白が自分自身をなぞらえた「楚狂」は、俗世を捨てた隱者であるばかりでなく、天界を飛翔する仙人でもあるのである。

「楚狂」すなわち接輿を仙人とする見方は、漢・劉向撰『列仙伝』にすでに見える。『列

「楚狂」と「狂夫」

仙伝』巻上、「陸通」の項に、「陸通者云楚狂接輿也。好養生，食藁盧木實及蕪菁子。遊諸名山，在蜀峨嵋山上，世世見之，歷數百年仙去」（陸通なる者は楚狂接輿を云うなり。養生を好み，藁盧木実及び蕪菁子を食う。諸名山に遊び，蜀の峨嵋山上に在り，世世之を見，數百年を歴て仙去す）とある。李白が詩の中で「楚狂」を歌う時は，おそらくこの一節を典拠としているであろう。

「廬山謠」詩の他に，「江西送友人之羅浮」と題する詩の中でも，李白は自らを「楚狂」と称している。

爾去之羅浮	爾は去りて羅浮に之き
我還憩峨眉	我は還りて峨眉に憩う
中闊道萬里	中闊 道万里
霞月遙相思	霞月 遙かに相思わん
如尋楚狂子	如し楚の狂子を尋ぬれば
瓊樹有芳枝	瓊樹 芳枝有らん

羅浮山と峨眉山とは，隔たること万里。もし君が私を訪ねてきてくれることがあるならば，私の所には玉の樹に芳しい花が咲いていることだろうと歌う。「瓊樹」は，仙境を連想させる詩語である。つまり，君が尋ねてきてくれる頃には，自分はすでに仙道を成就して仙境に居るだろうと歌っているのである。

総じて，李白が自ら任じた「狂」は，俗世から距離を置いたアウトサイダー，もしくは俗世を超脱した世界に住む仙人としての「楚狂」であり，後に述べる儒家的な杜甫の場合とは大きく異なり，道家的，ないしは道教的な傾向の強いものであった。

三 杜甫の「狂夫」

杜甫には詩題を「狂夫」とする七言律詩がある。上元元年（七六〇）の夏，杜甫四十九歳，成都での作。浣花溪のほとりに草堂を構えていた頃に歌われたものである。

萬里橋西一草堂	万里橋西 一草堂
百花潭水即滄浪	百花潭水 即ち滄浪
風含翠篠娟娟淨	風は翠篠を含んで 娟娟として淨く

雨裏紅蘂冉冉香	雨は紅蘂 <small>こうきよ</small> を裏 <small>うるお</small> して 冉冉 <small>ぜんぜん</small> として香る
厚祿故人書斷絶	厚祿 <small>こうろく</small> の故人は 書 断絶し
恒飢稚子色凄凉	恒飢 <small>こうき</small> の稚子は 色 凄凉
欲填溝壑惟疎放	溝壑 <small>こうがく</small> に填 <small>てん</small> せんと欲するも 唯 <small>た</small> だ疎放 <small>そほう</small> なり
自笑狂夫老更狂	自ら笑う 狂夫 老いて更に狂なるを

首聯・頷聯では、「百花潭」（浣花溪）を滄浪の水になぞらえ、そこが隱居の地にふさわしい秀麗で風情のある場所であることを歌う。一転して、頸聯・尾聯では、そうした土地にいながら、出世した旧友たちからは見捨てられ、自分の子供たちはいつも腹を空かして血色が悪く、いつ家族揃って餓死するかもしれぬという自らの不如意な境遇を歌う。周囲の美しい長閑な風景が、かえって自己の身の上の哀れさ、惨めさを際立たせている。そして、今にも野垂れ死にしそうだというのに、相変わらず放縦な自分自身を笑って「狂夫」と呼ぶ。

ここでの「狂夫」の語は、むろん前章の（五）に挙げた「狂夫」とはまったく別の意味である。基本的には（四）に挙げた「顛狂」、「清狂」などと同じ範疇に入るものであるが、「戲題寄上漢中王」詩の中で李瑀に追憶を促して「尚憐詩警策，猶記酒顛狂」と歌った時の「顛狂」、あるいは「壯遊」詩の中で自分の過去を述懐して「放蕩齊趙間，裘馬頗清狂」と歌った時の「清狂」と、この詩の中で杜甫が自らを「狂夫」と呼んだ時の「狂」とでは、その意味合いが少々異なるであろう。「狂夫」詩の中には、「顛狂」や「清狂」を歌う詩に付きものである酒が出てこない。羽目を外した狂態や常軌を逸した奇行を示す描写も一切ない。この詩において、杜甫は、酔眼ではなく、すこぶる醒めた目で自分自身を見つめているのである。

この詩の中で、杜甫は自らを「疎放」と呼んでいる。仇兆鰲はこれに注して、向秀の「思舊賦」に「嵇康は志遠くして疎なり、呂安は心曠ひろくして放なり」とあるのに基づくとしている。⁷⁾ 「疎放」（「疏放」とも書く）は、放縦でとらわれのないさまを言う語であるが、ただ勝手気ままで締めりのないさまを言うものではない。志が遠大で心が広闊なゆえに何ものにも束縛されることのないさまを表す言葉であり、むしろ肯定的な意義を含む。

こうした文脈の中でとらえれば、「狂夫」の「狂」字には、上に挙げた「顛狂」や「清狂」の例にはない、一種の思想性を認めることが可能である。杜甫の経歴と思想的傾向に鑑みれば、ここの「狂」字には、「進取の氣」を意味する儒家的な「狂」の価値観が込められていると考えてよいであろう。⁸⁾

「楚狂」と「狂夫」

『論語』「子路」篇に、「不得中行而與之，必也狂狷乎。狂者進取，狷者有所不爲也」（中行を得て之に与せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進みて取り、狷者は為さざる所有るなり）とある。道に向かって進取する気概としての「狂」は、孔子によって肯定的価値を認められたものであった。「狂」者は、人が躊躇してやらないようなことをあえて進んで行う積極性・自主性があり、志を抱き善を求める情熱家、理想主義者であり、「狷」者は、頑なに自らの信念を守る頑固者である。

儒家的な使命感を持って生きながら、晩年に至ってその理想を果たすには程遠い境遇に置かれている己を見つめ、杜甫は自らを「狂夫」と呼んで笑う。「狂」の原義が否定的なものであるゆえに、自分でそれを笑えば当然のことながら自嘲の語気が響く。この詩からは、もはや自らを嘲笑うしかない老人の哀しい姿が浮かんでこよう。

しかしながら、上述のように、ここの「狂」に儒家的な含意を認めるとすれば、これを単なる感傷的な自嘲の詩として読むことはできない。そもそも儒家的伝統において「狂」は恥ずべきことではない。詩の行間には、むしろ杜甫の自負心が見え隠れする。官吏として順調でなかったのは、自分が「狂狷」的な生き方をしてきたからだ、世俗におもねる「郷原」（凡庸な常識人）的な生き方をしなかったからだ、という自己の不遇を逆手にとって自負にすり替える心理が働いているように思える。それは自負であり、そうすることによってまた同時に自慰でもある。

つまり、この「狂夫」詩は、表面的には自嘲的、自戒的に歌ってはいても、実は、そこには自らを恥じたり、やましく思ったりする気持ちは少しもなく、むしろ不器用な生き方を貫き通してきた自分自身を誇りにさえ感じており、それが一種の自己満足となり、さらに矜持の念となって、不遇の境地にある詩人を慰め支えているのである。

「狂狷」は孔子が同道者として認める人間の中で、中庸の人が得られない時の次善の人物像であった。理想を求めにくい状況にある時、あるいは求めることを断念した時、「狂」を自任することによって、自らを次善の位置に保つことができる。それは官途において敗者となった者にとっては、儒家的伝統に裏打ちされた恰好の言い訳となる。たとえ「厚祿」とは縁がなくなり、幼子が「恒飢」の窮状にあらうとも、それでも自分の生き方を変える必要などない。むしろ名誉も財産もない清廉・清貧こそ我が望むところ、功名富貴はもとより望むところではない、という開き直りができるのである。

詩語としての「狂」字に込めたこうした思いは、同じく元来は否定的な意味の文字で杜甫が好んで用いた「懶」字や「拙」字の場合とよく似ている。「懶」は、自らの性格をものぐさと卑下しながらも、そこには俗事に拘泥しない自適の生活を誇りとする思いを託し

ている。「拙」は、世渡り下手と言いつつも、そうした生き方こそ本性に従った生き方であるとして積極的な価値を賦与しているのである。⁹⁾

なお、儒家的な「狂」者としての杜甫の生き方は、かつて左拾遺の官にあったこととも少なからぬ関係があろう。左拾遺は皇帝の過誤や朝廷の失策を諫める役割の官職である。愚拙なほどに仕事熱心な杜甫は、真っ正直な諫言のゆえに肅宗の怒りを買って帰省を命ぜられている。¹⁰⁾

「狂夫」詩は、安易に自嘲の詩と一言で片付けられる作品ではない。「自笑狂夫老更狂」一句には、晩年を迎えつつあった杜甫の屈折した、重層的な、頗る複雑な思いが込められているのである。

四 杜甫が歌う李白の「狂」

天宝三載（七四四）の夏、杜甫は洛陽で初めて李白と会う。李白四十四歳、杜甫三十三歳であった。わずかな期間であったが、二人は高適らを交えて梁・宋を巡り、次いで齊の地に遊びながら親交を深めた。杜甫が李白に贈った詩、あるいは李白のことを思慕して歌った詩は数多く残されており、その中に「狂」字を用いたものがある。

「贈李白」と題する詩は、天宝四載（七四五）の秋、李白が都長安から放逐されてまもない頃の作である。

秋來相顧尚飄蓬	秋來 相顧みて尚お飄蓬 ^{ひようほう}
未就丹砂愧葛洪	未だ丹砂 ^{たんしゃ} を就さず葛洪 ^{かつこう} に愧ず ^は
痛飲狂歌空度日	痛飲狂歌 空しく日を度る ^{わた}
飛揚跋扈爲誰雄	飛揚跋扈 ^{ひようぼっこ} 誰が為にか雄なる

この詩は、我が身と同じくいまだ官途に志を得ず漂泊の生活を送っている李白の境遇を歌う。憧れの仙道も成就しないまま「痛飲狂歌」、「飛揚跋扈」し、空しくも雄々しく振る舞う李白のますらおぶりを親愛の情を込めて歌っている。表面的には李白のことを歌いながら、似たような境遇にある杜甫自身のこともオーバーラップさせているであろう。

その十数年後、上元二年（七六一）、「不見」と題する詩は、成都の草堂で詠んだものである。

「楚狂」と「狂夫」

不見李生久 李生を見ざる事久し
佯狂真可哀 ようきやう 真に哀れむべし
世人皆欲殺 世人 皆殺さんと欲するも
吾意獨憐才 吾が意 独り才を憐れむ

李白は安史の乱に際して永王璘の軍に加わった。肅宗即位の後、永王軍は反乱軍とみなされ李白は謀反への加担者として捕らえられ、初めは死罪を言い渡されるが、減刑されて夜郎へ流されることになった。流刑地へ赴く途中で赦免されて、杜甫がこの詩を歌った頃、李白は長江流域の各地を放浪していたが、詩の原注に「近ごろ李白の消息無し」とあるように、杜甫にはそうした情報が伝わらず、李白の行方がわからないままになっていた。

「佯狂」は、偽って狂人のまねをすること。箕子や接輿に代表される中国古来の処世術であり、懐才不遇の知識人が乱世や苦境に身を置いた際に、そうした状況から逃れ、風波を避けて、我が身を保つための明哲保身の方策である。

杜甫は李白の「狂」を「佯狂」と明言し、そしてそれを哀れむべきこと、気の毒なこととしている。朝廷から追い出され、そのうえ運悪くいわれのない反逆罪に問われた李白。「痛飲狂歌」し、酔態を呈して狂人のごとく振る舞う李白の「狂」を「佯狂」と呼び、迫られてやむなくそうした処世態度をとらざるを得ない彼の境遇に対して哀憐の情を示している。

「狂」には「狂狷」と「佯狂」の二つの系譜がある。¹¹⁾「狂狷」は極めて儒家的な志向を示す生き方である。一方、「佯狂」は概して道家的な傾向の強いものであるが、儒家において不当な処世態度として退けられる生き方では決してない。しかしながら、杜甫は最後まで「楚狂」的な生き方を自らの処世態度として潔しとしなかったようである。

大暦三年（七六八）、「遣悶」と題する詩に、自らの不遇を嘆きながら、

倚箸如秦贅 いちやく しんぜい 倚箸は秦贅の如く
過逢類楚狂 かほう 過逢は楚狂に類す

とある。ここでは、自らをまるで「秦贅」や「楚狂」のようだと語っている。「秦贅」は、貧しくて嫁がもらえないために入り婿になる秦の男という意味である。漂泊流浪し、行く先々で知人の援助に頼りながら暮らしている自分自身を譬えたものであるが、これと対偶となって歌われている「楚狂」の語には、自嘲的、自虐的な響きが免れない。「楚狂」は

「秦贅」と並んで貶義の言葉として用いられており、杜甫はそうした境遇にある自分に煩悶を覚えているのである。

頑ななまでに生真面目な杜甫の性癖によるものか、官吏として朝廷に仕えて初めて自らの存在意義を認めるといふ儒家的使命感によるものか、その由るところは議論の余地があるとしても、いずれにしても杜甫の経歴や詩作を見る限り、彼が自分自身の生き方として「楚狂」を標榜した痕跡は認められない。

おわりに

「狂」という概念が、伝統的に儒家的系統と道家的系統のどちらにも現れるものであり、重層的な意義を内包しているため、「狂」字は、用いる詩人の思想的傾向によって、また詩人の経歴や境遇によって、その示す意味内容が時として大きく異なってくる。

そうした状況が顕著に現れている例として、本稿では李白の「廬山謠」詩と杜甫の「狂夫」詩を取り上げた。「狂夫」と「廬山謠」は、奇しくも同じ上元元年（七六〇）の作であり、両首とも詩人が自らを「狂」と称した作品であるが、第二章、第三章にそれぞれ述べたとおり、「狂」字の使い方には極めて対照的な相違が認められる。

この二人の詩人の詩風について、杜甫を儒家的、李白を道家的とする一般的な論評は、「狂」字の用法を巡っても同じ結論へと導かれる。また、巖羽の『滄浪詩話』に「子美不能爲太白之飄逸，太白不能爲子美之沈鬱」（子美は太白の飄逸を爲す能わず，太白は子美の沈鬱を爲す能わず）とある有名な評語に照らしてみても、両者の用いる「狂」字から醸し出されるイメージは、この評語の語るところとまったく同じ対照性を確認することができる。「楚狂」を名乗って仙界を希求した李白の「狂」には、読み手は飄逸とした印象を覚えるであろうし、一方、生涯「狂狷」たらんとして苦悩した杜甫の「狂」には、沈鬱な印象を禁じ得ないであろう。

李白・杜甫に至って、詩語としての「狂」字は、使用頻度の上からのみならず、内包する詩的意義の上からも飛躍的な発展を遂げ、詩人の処世観や世界観を論ずることができるほどまでに豊かな含蓄を持つようになった。その後、中唐を経て宋代の詩人たちによって継承され、ますます思索的深みと文学的味わいを加えてゆくのである。

注

1) 邦文では、横山伊勢雄「詩人における「狂」について——蘇軾の場合」（『漢文学会会報』第三十

「楚狂」と「狂夫」

四号、一九七五年)；藤村浩一「黄景仁の「狂」について」(『立命館文学』巻四三〇、一九八一年)；宇野直人「詩語としての「狂」と柳耆卿の詞」(早稲田大学『中国文学研究』第九期、一九八三年。後に『中国古典詩歌の手法と言語』研文出版、一九九一年、第三章：柳永の「狂」——中国詩歌に見る「狂」の倫理性の伝統)；二宮俊博「洛陽時代の白居易——「狂」という自己意識について」(九州大学『中国文学論集』第十号、一九八一年)；保苅佳昭「蘇東坡の詞に見られる「狂」について」(日本大学『漢学研究』第二十七号、一九八九年)；西岡淳「『劍南詩稿』に於ける詩人像——「狂」の詩人陸放翁」(京都大学『中国文学報』第四十冊、一九八九年)；三上英司「韓愈詩における狂字の用法について」(北海道教育大学『人文論究』第五十三号、一九九二年)；谷口真由実「杜甫の詩と放浪——詩語「狂」にみる杜甫の心性」(『古今東西』武蔵野書院、一九九九年)；谷口真由実「狂夫」(後藤秋正・松本肇編『詩語のイメージ』東方書店、二〇〇〇年、第五章：日常からの逸脱)；山島めぐみ「杜甫における「遊び」——「狂」の用例を中心に」(筑波大学『中国文化』第六十四号、二〇〇六年)など参照。中文で李白・杜甫の「狂」について論じたものに、曹方林「論李白的「狂」」(『成都師專學報』一九九〇年第二期)；朱雪里「解説李白：縦酒狂醉与人生悲劇」(『梁山師範學院學報』第十七卷第六期、二〇〇二年)；吳明賢「試論杜甫的“狂”」(『杜甫研究學刊』一九九六年第三期)；唐磊「略論杜甫之狂」(『南京工業大學學報』二〇〇三年第一期)；吳懷東「自笑狂夫老更狂——論“狂”与杜甫文化精神」(『固原師專學報』第二十五卷第五期、二〇〇四年)などがある。

- 2) 注1の宇野論文は、「詩史におけるこの字の様相を通覧すると、「狂」の字が詩語として定着したのは盛唐以降であると察せられる」とし、『詩経』から晩唐の魚玄機に至るまでの主な詩人やアンソロジーにおける「狂」字の使用頻度を全作品数と併せて示している。
- 3) 宇野論文によれば、白居易の詩には「狂」の用例が九十七例、韓愈と孟郊にはいずれも二十五例がある。中唐および宋代の詩人の「狂」については、先学諸氏に個々の論著がある。また、宋代は、詩のみならず、蘇軾・柳永らの詞にも「狂」の用例が見られる。注1参照。
- 4) 王琦注は、「漢書昌邑王傳、清狂不惠。蘇林曰、凡狂者陰陽脈盡濁。今此人不狂似狂者、故言清狂也。或曰、色理清徐而心不慧曰清狂。清狂、如今白癡也。琦按、詩人所稱、多以縱情詩酒之類爲清狂、與漢書所解殊異」とあり、この詩における「清狂」が「不慧」や「白癡」など従来の意とは異なるとしている。
- 5) 例えば、王維「羽林騎閨人」詩に、「行人過欲盡、狂夫終不至」、同じく「洛陽女兒行」詩に、「狂夫富貴在青春、意氣驕奢劇季倫」などとある。
- 6) 『莊子』「人間世」篇に、「孔子適楚。楚狂接輿游其門曰、鳳兮鳳兮、何如德之衰也。來世不可待、往世不可追也。天下有道、聖人成焉。天下無道、聖人生焉。方今之時、僅免刑焉。福輕乎羽、莫之知載。禍重乎地、莫之知避。已乎已乎、臨人以德。殆乎殆乎、畫地而趨。迷陽迷陽、無傷吾行。吾行郤曲、無傷吾足」とある。
- 7) 仇兆鰲の注に、「向秀思舊賦、嵇康志遠而疎、呂安心曠而放、公詩每用疎放、本此」とある。
- 8) 『統国訳漢文大成』文学部第五巻『杜少陵詩集』(鈴木虎雄著)の「狂夫」の字解に「病的のきちがひには非ず、道に向て進取するものをいふ」とある。
- 9) 安東俊六「杜甫における「懶」と「拙」」(九州大学『中国文学論集』第十一号、一九八二年)参照。
- 10) 注1に掲げた谷口「狂夫」論文は、房琯事件に杜甫の「狂狷」的性格を認めている。韋陟が「甫言雖狂、不失諫臣体」と奏上したこと(『新唐書』「韋陟伝」)を引いているのは示唆に富む。

- 11) 拙稿「狂狷」の系譜——中国古代思想における「狂」の諸相（一）」（『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第三十七号，二〇〇六年），「佯狂」の系譜——中国古代思想における「狂」の諸相（二）」（同第三十八号，二〇〇七年）参照。